



MA日本キックボクシング連盟
第5回梶原一騎杯 キックガッツ2002
6月30日●東京・後楽園ホール

○MA日本Sライト級王者中林勇人(右・ビクトリー)に前MA日本ライト級王者の井上哲(山木)が挑戦した一戦はキャリアに勝る井上が中林を翻弄、大差の判定勝ちを収め、新王者となった。試合後は「全日本キックにリベンジしたい」と交流戦をアピール。標的は昨年春に敗れている金沢久幸か?



○約2年ぶりに古巣のMA日本キック後楽園大会へ登壇した加藤賢助(左・PHOENIX)は1Rこそランポー豊栄(東念)のパンチ攻撃に苦しんだが、2Rになると、ヒジ打ちをヒットさせて形勢を逆転、二度ダウンを奪った末に、2R2分30秒、右フックで逆転KO勝ちを決めた。内容的には加藤のベストバウト。モンゴル人ファイターのランポーは復帰戦を終了す



世の中がワールドカップ決勝で熱狂している時 MAキックは キューバ一色!



●メイン/UKF世界フェザー級
タイトルマッチ3分5R(第10試合)
○ラウル・ロビス(キューバ、56歳、30歳)
(判定2-0) ●ラビット関(山本ジム、57歳、21歳)
●ラビット関(山本ジム、57歳、21歳)
●ラビット関(山本ジム、57歳、21歳)



○4月にMA日本フェザー級王者になったばかりの山田健博(右・東念)は元同級王者の天野哲成(マイウェイ)と激突。2Rに右ハイで先制のダウンを奪うや、一気にラッシュ。最後は2分55秒でレフェリーが試合を止めた

○当初は関と対戦する予定だったヨシユット・ゲッソンリット(右・真樹ジム愛知)は安倍乃泰彦(新潟山木)と対戦して無難に判定勝ち。今後もヨシユットは日本内での試合を希望している

○ワールドカップ決勝の裏という日程が響いたせいか、観客の入りは今ひとつ。それでも場内にスクリーンを2つ設けるなど、MAならではのやる気は感じられた



●メイン/UKF世界ライトウェルター級
タイトルマッチ3分5R(第9試合)
△武藤孝行(ビクトリージム、63歳、27歳)
(判定2-0) ●エリック・カスターニョ(キューバ、64歳、33歳)



○過去33戦全勝というレコードを持つカスターニョだが、ヒザ蹴りありのルールは今回が初めて。それだけに最初は慣れぬルールに戸惑ったが、随所で得意のパンチの連打で序盤の劣勢を跳ね返した
○引き分けの裁定が下されるや、勝利を確信していた武藤がガッカリ。確かに序盤までローを効かせていたが、中盤から王者のパンチをもらいすぎた

「とにかく期待して下さい。今度MAに来るキューバの連中は、とんでもなく強い連中ですから」
試合の数日前、白龍ジムの羽田真宏会長から電話をもらった。羽田会長の話は時々誇張こそあるものの、貴重な情報源になるケースも多い。今回はまさにそうだった。エリック・カスターニョとラウル・ロビスはとてつもなく大きなインパクトを持つ選手だったのだ。
とりわけ何が凄いかといえば、溢れんばかりのガッツだろう。奇しくもカスターニョは武藤の、ロビスは関のローによって、序盤は劣勢を余儀なくされている。ロビスに至ってはダウン寸前に追い込まれたほどだ。その攻防だけを見たならば、誰もが関の王座奪取を信じたことだろう。
だが下半身に深いダメージを負ってもロビスは決して勝負をあきらめない。反対に関が攻め疲れるのを待って攻守を逆転。3Rからは完全に試合の主導権を握ってしまう。彼の闘いぶりを目の当たりにしたら、久しぶりにハングリー精神という言葉を思い出した。
試合後、関は55歳以下のクラスへ戻ることを示唆した。通常体重がフェザー級の男にとって、ライト級から減量してきたような相手と闘うのはハンディがありすぎると判断したのだ。
確かにロビスの身体は前日計量も味方したのか、関のそれよりも一まわり大きかった。聞けば、ロビスは以前ボードに乗っている時にサメに襲われて左手の小指を欠損したが、そのサメを撃退したという勇敢な逸話を持つ。サメと闘うことを考えたなら、どんな相手も怖くない。MAがキューバパンカラ(赤と水色)に染まった。(布施)